意向調査結果（ヒアリング調査結果）

豊中市都市農業振興基本計画の見直しに向けて、市内での農業に関する取組状況や農地活用の意向を把握するため、市内農業者、市民団体、庁内関係部署等を対象にヒアリングを行った（2024年8月上旬に実施）。

1. 農業者 11名

（1）現在の取組状況など

①農業経営

- ・農地を守るために続けているが、収入をめざして耕作するものではない。
- ・市内で、「農業ですべての収入を得ること」を目的に実践している人はいないだろう。特に新規就農は、不動産などの収入基盤がないと難しい。
- ・宅地農地で農業を行っている。建物がまわりにあることで、日の当たる時間が短い（14時以降は日が当たらない）。街路灯などの明るさもあり、お米の品質が落ちてしまう。農地と周辺環境との関係は希薄になっている。
- ・農業機械の整備で1,000万円程かかる（+維持管理費）。農協に委託することもできるが、費用が掛かるため農業をする意味がなくなってくる。
- ・農業機械の更新時は非常に悩んだ。高齢化になっていくなかで、農業機械に費用捻出をすることは経営的には厳しい。機械の更新時が転機になる可能性はある。

②体験イベント等

- ・小学校の学校田の管理を行い、農業体験、食育活動を担っている（公民分館長と連携して実施）。予算は教育委員会、刀根山小や桜井谷小にも広がっている。
- ・今年は小学校と連携した田植えイベントを予定している。
- ・竹林でタケノコ掘りを開催している。知り合いに配ったり、近隣の子ども会イベントなどで活用している。
- ・さつまいもは、保育所から依頼があり11月頃に芋ほり体験をしている。育てるだけでツルを切る作業などは保育園でしていただけるため、負担は少ない（1つのモデルかもしれない）。

（2）農地の貸借

- ・豊中の農業委員会からご紹介いただき、農地を借りることができた（就農できた）。タイミングがとても恵まれていた（みどり公社にも間に入っていた）。
- ・一方で、農地の貸し借りに関して、支援制度があることを農業者は知らない（周知が重要）だろう。円滑に継承していけるよう周知は重要。
- ・また、「新規就農者に貸すと、適切に管理されない。返ってこない」などのイメージもある（悪い噂が拡大して伝わっている場合がある）。しっかり研修を受けて就農することが大事である。「荒れた状態で返ってくるのでは」という懸念がある。貸してよいか見極める人が重要。

- ・農業者が農業を止めるタイミングがなく、「特定生産緑地の更新時期にやめよう」となる可能性がある。
- ・地域の農業者は「農地を貸すこと」に抵抗感があるだろう。中間組織が入ることが非常に重要。市民農園にすることも考えられるが、うまく管理されていないイメージを持たれている。
- ・「閨小作で何十年と守られている農地」は少なくない。あとで問題とならないよう、手続きをとるなど対応しておくことは重要である。
- ・「閨小作で農地を借りている人」もしっかり手続きを踏むことで、新たな担い手となる可能性がある。閨小作の実態を把握し、そこにアプローチする手もあるだろう。

(3) これからの豊中市農業に向けて

①新たな担い手の確保・育成

- ・農地を通った人が、「農作業をさせてほしい」と言われることはある。
- ・農家以外で農作業をやりたい人は多くいるように思う（農地を借りるとなるとハードルは高いと思うが）。
- ・「市民など非農家でも農業をやりたい人」は少なくないと感じている。人口が多いため、割合は低くても掘り起こせば一定いるだろう。そのような人を市が把握して、新たな担い手としてアプローチしてはどうか。
- ・ファーマーズで現在取り組んでいる体験農園について、「新規就農の入り口」として位置付けることも考えられる。市民農園で何期もやられている方をピックアップして、呼びかけてはどうか。
- ・新たな担い手を育てたとしても、農地と上手くマッチングさせないと意味がない。
- ・箕面市では農業公社が主催し、農業体験を募集し、特にやる気がある方に対しては、就農に向けた支援をしている。

②ブランド化

- ・観光農園を増やしていくには、「半田農園のいちご」のようにモデルとなる農園が重要。旗振り役がいると動きやすい（先駆者、先輩に聞くのが一番早い）。
- ・「新規就農者の発想をサポートしていく体制」が必要である。ブランド化まで進めようとすると、かなりの熱量が必要である。
- ・原田緑地の公園（伊丹空港隣接地）に「農園ゾーン」を作ってはどうか。生産振興について、農業者個人の資本や技術に頼った展開をいきなり期待することは難しい（一定の投資が必要）。
- ・例えば、いちごやブルーベリー農園などは、時間はかかるが、売れる商品づくり、農業経営モデルは作れるだろう。その場合は、JA連携が重要である（競合ではなく、共存共栄の関係）。「豊中モデル」としても考えやすい。アイテムは野菜より果物の方がブランド化しやすいのでは。
- ・豊中のブランド化について、なたね菜は、過去に作られていた。種は菜種油になる。他には、オオサカシロナ、綿花など。

- ・その他に、シークワサー、月桃やバナナ、ゴーヤ、パイナップルなどはどうか（兄弟都市である沖縄市と関係させるなど）。

③地産地消（マーケットの多さを生かす）

- ・農地を身近に感じてもらい、地元の人と新住民の方の距離を縮めたい。農業をやりやすい環境を作ることが大事。
- ・豊中市農業の強みは、マーケットが多いことである。自分は作ることだけに専念し、お客さんが畑に買いに来る経営モデルは1つの理想である。
- ・観光農園の展開は、車で1時間圏内でみると競合は少なくない。そのため、「自転車で通える」くらいを強みにした展開はどうか。観光農園ではなく、体験農園型でさつまいもやタマネギを自分で収穫して持って帰るなど。

④子どもの体験・食育など

- ・子どもたちに対して、食べ物の大切さ、農地の必要性を伝えており、このような取組を農地で実施できないか。学校の近くに農地があることが条件になるだろう。
- ・保育園や小さい子どもの農業体験は、「掘って出てくる瞬間」が喜ばれる。アイテムとしては、さつまいもやじゃがいもなどがよい。
- ・さつまいもの体験農園は拡げやすい（農家にとっても利用者にとっても）。市内では保育園と農家の個人的なつながりで実施されているケースが多いが、仕組み化、制度化されることで推進しやすくなるだろう。市が入ることで信頼感が増す。

⑤その他、農地の新たな活用

- ・都市農地は災害対策になるため、農地は残さなければならない。
- ・都市であるため、「農作物を作って売る」だけの機能ではなく、「コミュニティの場所」にしていくことが重要である。
- ・「楽しい取組」でないと続かない。「楽しい」を拡げていくことが大事である。
- ・羽曳野市の農家（なないろファーム）では、SNSでボランティアを募って農作業に参画いただく取組（＝農業を通じて地域の方と知り合う取組）を行っている。いちじく、にんじんを栽培し、販路をもち稼いでいる。このような取組が豊中市でも拡げればよい。
- ・農福連携、援農などのマッチングはかなり難しい。複数品目を同時に作っていることもあり、単一作業が頼みにくい（作業を選ぶ必要がある）。また、農家にとっては、その対応に負担感を感じている。

2. 農業者（市民農園のオーナー）（2名）

（1）運用状況

①オーナーとしての管理状況

- ・市民農園を始めたのは親の代であり、労力が大変のため、市民農園に切り替えた。
- ・オーナーの作業として、区画割り、まわりの草刈り、水道の管理がある。水道が出っぱなしにならないよう自閉水栓をつけている（設置費用が高い）。水道代が高額であり、夏は高くなる。
- ・4～5月の更新時期に片付け作業（原状回復）が必要であり、その作業が負担である。今年は雨が多く、作業が進まなかった。
- ・また、片付け作業後の区画割りがとても大変。土のあげ方により、大きさが違うように見える。土の高さを変えすぎると水が溜まりやすい。畑の端は少し大きめにとるなど工夫している。
- ・片付け作業時に、土の中に支柱が埋まっている、ごみが埋まっているなどがある。紐類がトラクターに巻き込まれるなどもある。その他に採寸作業も必要である
⇒区画整備作業に対する支援があれば嬉しい（シルバー人材センターに頼むことも考えられるが費用が必要）。
- ・管理は、自身の他に知人2人に手伝ってもらっている。利用者の4～5人は自主的にお手伝いいただいていたが、皆さん高齢化しており、継続が難しい。
- ・ごみが捨てられるため、ごみ置き場を設置しないようにした。
- ・鍬や支柱を農園内に勝手に置いてあることがある。農機具を置く場所を設けるべきか悩んでいる。「置いていたら処分します」という張り紙を作ったこともある。

②利用者との関わり状況

- ・利用者には、質問を受けたら答えるようにしている。押し付けるような教え方はせず、経験したら作れるようになると考えている。
- ・管理できなくなった利用者に対して、揉めごとは起こしたくないため、強く言えないところはある。
- ・農園の利用者有志で2年程パーベキューを実施したことがあるが、交流というより苦情の会みたいになって中止した。
- ・農業委員会を通じた苦情は対応がしやすい。10年程前はマナーがかなり悪く、市に対応いただき少し軽減された。
- ・利用者どうしで交流をしていることは多いと聞いている。オーナーからすると「利用者に何かを頼む」ということには抵抗がある（第3者的な立場の方でない頼みにくい）。利用者への対応は、利用者ごとに変わらないよう、一線を引いた関係性を保っている。

（2）今後の市民農園について（アイデア等）

- ・民間の体験型農園（手ぶらでアドバイザー付きの農園）の様子を見たことがあるが、若い人が楽しくされているイメージであった。

- ・ 2年契約ではなく3年にしてはどうか。現在は「多くの方に、均等に」という趣旨から、「2年契約・抽選」になっていると考えている。
- ・ **オーナー全体連絡会**は過去には開催されていた。交流はなく、情報が入ってこない。
- ・ トラクターをお持ちであれば、市民農園は開設しやすいが、水道を引いてくる必要があり、設置に費用がかかる。
- ・ **市民農園の開設に向けては、「運営するにはどのような作業があり、どのくらいの負担があるか（作業、時間、金額など）」を見える化することが重要**である。
- ・ 土の補助があれば助かる。土が減っていくことは考えられる。
- ・ **「親子向けの農園」など、テーマ性を持たせた農園があってもよい（既存の農園ではなく、新しく始める農園など）。**
- ・ **アドバイザーが定期的に来てもらえる取組**があると、利用者も喜ばれるのではないか。

3. 農業に関わる市民団体等 1 団体

(1) 取組状況

- ・ 空港の隣接地において、公園みどり推進課から委託を受けた農園管理・体験事業を行っている（2002年から実施、広さは900㎡）。農園管理は約10名で担っている。
- ・ 12月から4月はさつまいもを育てており、他にも季節ごとに収穫体験を実施している（収穫体験、自然農園など）。また、農業体験と合わせて、堆肥、資源循環、食べ残し、調理くずの話などを行っている。
- ・ 体験事業には、定員を上回る申し込みがあり、市内全域から来られている。
- ・ 学校田がある2校では、出張授業を行っている。
- ・ その他の学校でも、キエー口（リンゴ箱）を使い、とよっぴーを使った農作業体験を行っている。布袋は費用が高いためキエー口を使用している。

(2) これからの豊中市農業に向けて

- ・ **学校農園のような取組があれば、関わることはできそう**であり、市民団体の目的とも合ってくるためやってみたい。
- ・ **松戸市のような肥料バックを活用した取組（※）はとてもよい。市民運動として広がっていくことも関心はある。**

※コミュニティづくりのきっかけとして、町中の公共空間で食べられる植物を育てるエディブルウェイプロジェクト

4. 庁内の関係部署 4 部署

(1) 健康推進課

- ・食育推進計画を今年の4月に策定した。菜園活動などは位置付けている。また、栄養関係で野菜摂取などを考えている。
- ・野菜不足は若い人に多いため、若い人にPRはしたいと考えている。
- ・カゴメが開発した「手のひらセンサー（野菜の摂取状況がわかるセンサー）」をレンタルしており、朝市や農業祭での活用は考えられる（貸し出しは可能である）。サブスク契約のため多くの利用を図りたい。必ずしも管理栄養士が同行する必要はない。
- ・健康づくり推進員は、医療保険センターが管轄。推進員は校区ごとにいるが高齢化している（合計で約60名）。うまく代替わりした校区もある。福祉と兼ねて担っている方が多い。
- ・料理教室と栽培教室（カブを植える）を一緒にしたプログラムがあれば面白い（他市でやられていた）。

(2) 学校給食課

① 学校給食

- ・市内には給食センターが2つ、単独調理校が3つあり、2万4千食/日を作っている。給食に関する情報は栄養教諭や学校給食課が発信している。
- ・市内農産物では、お米と玉ねぎ（6月）を提供している。
- ・玉ねぎは、JAを経由して合同食品がマチカネコロツケとして製造し、給食メニューとして提供している。青ネギも入れている。
- ・学校給食課から農業推進課にリクエストを出して、JAなどに照会をかけて実施している。リクエストした品目は、タマネギのほか、コマツナ、大根、青ネギなどがある。
- ・課題は、量が揃わないことである。規格が厳しい可能性もあり、少し緩められないかは考えられる。規格が小さすぎると、皮を剥くと可食部が少なくなり過ぎる可能性がある。
- ・学校給食センター（2か所）から排出される調理くず、小学校の給食残さは、とよっぴ一事業でほぼ堆肥化されている（中学校の給食残さは堆肥化できていない）。

② 農業体験・食育学

- ・学校によっては、農業者と連携した取組を行っている。箕輪小学校、小曾根小学校（学校に大きな農園がある）は積極的である。庄内桜学園（義務教育学校）は近隣の農地と連携して、田植え体験などをされている。
- ・府の学校給食会からの取組で、バケツ稲の取組照会があり、市内の小学校の1校が毎年エントリーしている状況である。
- ・今年度から小中学校ごとに食育計画を立てるようになった。取組が進んでいないところに対して、何か提案をすれば関心を示される可能性がある（提案はする必要はある）。

- ※放送委員会が給食レシピを読む、牛乳パックを洗って干すなど取組はさまざま。
- ・栄養教諭は10名おり、学校からのオーダーがあれば授業などを行っている（ただしマンパワーや授業機会の確保ができるかなどの考慮が必要）。
 - ・給食センターの探検ツアー（170組 340名）、親子クッキング（20組）などの取組をしている。農業者さんにも来てもらって話をしてもらうことも可能である。生産の話が入るとプログラムが充実するだろう。
 - ・太子町では、親子農園をテーマに、農家と連携したさつまいもの植付から収穫体験などをされていた（4回講座など）。保険センターが取りまとめていた。
 - ・その他、JA北部農協の方に出席授業をしていただいた。

（3）コミュニティ政策課

- ・「夢基金プロジェクト」という活動支援制度があり、市民活動団体の支援をしている。主体は団体にあり、市は財政支援がメインである。
- ・夢基金は、1件当たり10万円（1～3年目、3/4助成）、50万円（4～5年目、1/2助成）の支援が受けられる。また、その発展型の制度として協働事業市民提案制度がある。
- ・農業（また農地活用）に関心がある市民団体も何団体がある。ただし、義務感や責任感を出されると引いてしまうため、まずはライトに進めていける方がよい。
- ・企画提案内容に対する助言や企画書の書き方の支援なども可能である。コミュニティ農園を新たに立ち上げる際の財源として、夢基金、共同事業を活用できるのではないかと。

（4）地域共生課

- ・豊中あぐりは、8箇所、150名の会員がいる。「男性の定年後の居場所づくり」が主目的。であり、孤立・孤独を防ぐことを。「ある事業を継続するには生産性が必要」ということで農作業が取組のベースとなった。近年は地域づくりに広がりつつある（最近では、子ども農業体験事業なども実施）。
- ・8箇所のうち1箇所（原田菜園）は農地である。その他は宅地を農地にしている。部会やチームがあるのかなどはわからないが、役割分担などはあるだろう。
- ・豊中あぐりの会員は年会費は2,000円。
- ・豊中あぐりの位置づけは、社協の自主事業であり公的資金が少し入っている。
- ・土地は無償で借り、数カ月かけて農作業をできるようにしている。
- ・土地を探してくることが難しい。また、ご厚意で借りているため、相続等で返す必要が出ている。農地を含む活動場所は探している。

○見直しに向けて

- ・豊中あぐりによるコミュニティファーム事業は考えられる。夢基金を活用するなど。農業者からすると「どのように農地が使われるのか」という不安もあるため、農地で行う活動についてあらかじめ条件を付けて貸借する方法をとることが重要では。
- ・社会福祉法人との連携は考えられる。

以上